

高等学校英語科における基礎的・基本的な 知識の理解と習得をめざした授業づくり

学籍番号 179974

氏名 指崎 璃子

主指導教員 田中 満公子

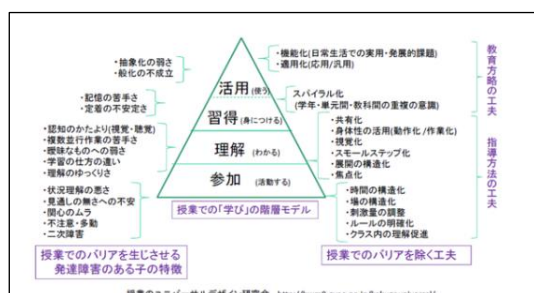
1. 背景と目的

日々発展し続ける社会で、その中で生きる子どもたちに必要な能力を育むための教育活動が進められている。思考力や判断力、表現力の涵養の必要性が説かれる一方で、それらの基となる基礎的・基本的な知識や技能の習得の徹底もまた欠かせない。実際に、高等学校学習指導要領（平成30年3月公示）にも、新しい時代に必要となる資質・能力のひとつとして、「生きて働く知識・技能」が挙げられている。

そこで本研究では、その目的を「高等学校英語科において、生徒たちに基礎的・基本的な知識を身につけさせるには、どのような取り組みが効果的であるのか検証すること」とし、各理論に沿った授業を設計・実践することで、テーマの達成をめざした。

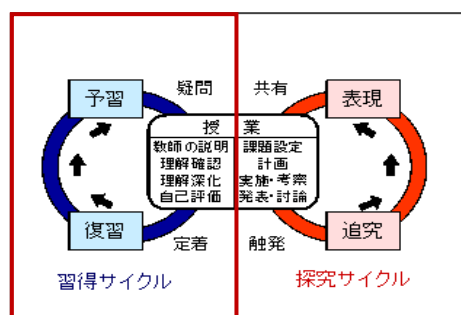
2. 実践概要

第1 Semesterにおける観察実習により実習校の状況を把握し、第2・3・4 Semesterにおいて、実際に授業を行った。第2 Semesterでは、テーマの達成に近づくため、クラス全員がわかる授業をめざし、とりわけ「参加」と「理解」段階に焦点を当てて、授業のユニバーサルデザイン（UD）化を促すための工夫を取り入れた授業を行った。第3・4 Semesterでは、内容の理解と習得を進めるための授業の枠組みを示した「教えて考えさせる授業」理論を用いて実践を行った。



ユニバーサルデザイン化された授業のモデル図

(小貫・桂 2014)



習得の授業としての「教えて考えさせる授業」図

(市川 2015)

3. 成果と課題

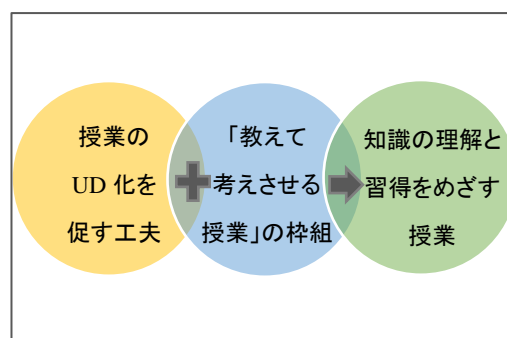
第2・3・4セメスターを通して、授業実践で扱った文法項目に関する事前・事後テストと振り返りシートの記述の分析によって授業の効果検証を行い、有効な取り組みは何であるかを考察した。第2セメスターでは、2年生の英語表現Ⅰの科目において授業を実践した。比較・最上級の内容について、3チームに計13時間の授業を行った。結果として、事前・事後テストより、授業のUD化を促す工夫の中でも、特に視覚化が内容理解の促進に有効であることが示唆された。一方で、工夫を複数取り入れることで、授業を構造化できていなかったことが課題として残った。また、振り返りシートの記述および筆者による授業中の観察からは、生徒たちは概ね授業に参加できていることが明らかになった。

第3セメスターでは、前実習での結果と課題より、①授業の展開を構造化し、②基礎・基本の理解と習得に着目して実践を進めていくという2つの方針を定めた。そこで、概念や手続きの意味理解のための授業枠組みである「教えて考えさせる授業」の理論を用いて授業を設計し、実践することとした。当該実習では、1年生の英語表現基礎の科目において、3チームに計15時間の授業を行った。単元は時制（現在・過去時制／未来表現）であった。事後テストの平均点の上昇が見られたことから、生徒たちは「教えて考えさせる授業」を通して、理解を深められたことが分かった。しかし、事前テストよりも点数が低くなった生徒も一定数存在したことから、「教える」段階において、「何を」「どのように」教えるのかに課題が残った。

第4セメスターでは、同科目において、不定詞の単元の授業を、3チームに計15時間行った。用いる理論は変えず、前実習での課題の解決に特に尽力した。結果として、事後テストにおける正答率の上昇や、振り返りシートの記述より、生徒たちが単元について理解し、習得を進められた様子を読み取ることができた。

4. まとめ

以上より、テーマの達成には、授業のUD化のための工夫を取り入れた授業や、「教えて考えさせる授業」の流れに即した授業展開が有効であることが部分的に示された。他方、理論全体の有効性の証明には伸び代を残した。2年間にわたる実践より、「教えて考えさせる授業」の流れで授業を構造化し、その中にUD化の工夫を当てはめることが、授業の有効性を高めるのではないかと考察したが、この効果の検証は今後の課題としたい。



基礎的・基本的な知識の理解と
習得をめざす授業の構成図